

## 日本語の書き言葉 (ナラティブ) におけるヴォイス (態) の選択要因 トピック性を中心に

金原いれいね

堀江薫

PXB13245@niftyserve.or.jp khorie@intcul.tohoku.ac.jp

東北大学大学院国際文化研究科

### 0. はじめに

これまでも、談話におけるヴォイス (態) の選択は、類型論や機能主義的な分析のアプローチから情報の新旧、テーマ、トピック、視点といった概念によって論じられてきた (cf. 久野 1978, Li and Thompson 1976)。しかし、テーマ、トピックなどの概念に基づく分析は分析者の主観性を帯びやすく、自然な談話では、他動詞構文の主語と目的語 (あるいは、それらに対応する受動文の名詞句) が、必ずしも新情報と旧情報に対応するとは限らない。そのため、談話におけるヴォイスの選択を、情報の新旧、テーマ、トピックなどの概念を利用して予測することは難しい。

そこで、本研究では、動作主と被動作主の相対的な「トピック性」 (指示対象の談話における重要度) の度合がヴォイスの選択を動機づけているという仮説 (cf. Givón 1983a) に基づき、日本語のヴォイスの選択においてトピック性が果たしている役割を、小説のコーパスを用いて統計的に解明する。それによって、言語的なコンテキストから、ヴォイスの選択が予測可能であることを示す。

### 1. 統計データ

統計資料としたのは『二十四の瞳』、『友情』、『路傍の石』 (『CD-ROM版新潮文庫の100冊』 (1995)) である。ただし、他動詞構文といっても、中には (1a) のように、主観性を表わす助動詞が付加されているために、意味を変化させることなくヴォイスを変換することができないものもある。

- (1) a. おかあさんこそ、文句いいたかったのに、  
あとき。(二十四の瞳: 280)  
b. おかあさんこそ、文句いわれたかったの  
に、あとき。

また、一般に、日本語では無生物よりも有生物が主語の位置に現れやすい。本研究では、ヴォイスの選択の語用論的な条件を明らかにする目的から、他動詞を含む構文であっても、このよ

うに統語的、意味的理由によってヴォイスの対立が存在していない例はデータから除いた。データ選択の基準となるヴォイスの対立とは、能動文と受動文の意味的な同一性を前提とした上で、周辺のコンテキストから抜き出して節として見た場合、どちらの構文も同様に文法的であるという状態を指す。

### 2. 分析

Givón (1983a) は、談話においてより重要な役割を果たしている指示対象が主語の位置に現れやすいことを指摘した。そして、指示対象の談話における重要性を「トピック性」 (topicality) という概念によって捉え、さらにトピック性を数量的に測定する方法を提示した。本研究では、類型論的な汎用性が認められているGivónのトピック性の測定方法を用いて (cf. Givón 1983b, 1994, Wright and Givón 1987)、日本語の小説資料に含まれる他動詞構文の動作主と被動作主のトピック性の数量化を行った。

#### 2.1 トピック性の認知的側面

他動詞構文の動作主と被動作主のトピック性は、指示対象の「前方照応可能性 (anaphoric accessibility)」と「後方照応の持続」 (cataphoric persistence) という2つの概念によって規定される。

まず、前方照応可能性であるが、これはChafe (1987, 1994) の「活性化」 (activation) と同様、概念 (concept、名詞的なもの以外にも動詞的なものまですべて言語によって表わされる心的表象) の認知的な状態を捉えることを意図している。名詞句の前方照応可能性が最も高いのは同一の対象が直前のコンテキストで言及されている場合である。そのような場合にはそれだけその対象が聞き手、あるいは読み手の記憶に強く残っているため、指示対象を解釈する認知的なプロセスにかかる負担は最も少ない。つまり、先行するコンテキストによって得られた情報を検索して指示対象を特定化するのが容易である (anaphorically accessible)。

それとは逆に、同一の指示対象が前のコンテキストで言及されていても、それがかなり前である場合には、検索にかかる負担も重く、補助的な情報なしでは特定化が難しいと考えられる。このように、先行するコンテキストから容易に指示対象が特定できない場合、照応可能性が低いとされ、トピック性も低いと考えられる。

後方照応の持続は後続するコンテキストとの関連で規定され、談話全体における指示対象の重要度を表わす。後方照応の持続に関して高いトピック性を示すのは後続するコンテキストで一貫して連続的に言及される対象である。それらの対象はそれだけ談話全体における重要度が高いと考えられる。逆に、後続するコンテキストで、一度も言及されない指示対象はトピック性が低いと考えられる。

## 2.2 トピック性の測定方法

前方照応可能性は、指示対象の「参照距離」(referential distance)の値を、後方照応の持続は、「トピックの持続」(topic persistence)の値を測定することによって数量化される。

### 2.2.1 参照距離

参照距離は、先行するコンテキストで同じ対象が最後に言及された節までの距離を節の数によって示す方法によって測定される。直前の節で言及されていれば、「RD=1」の値が付与され、2から3つ目の節で言及されていれば、「RD=2-3」の値が与えられる。4つ以上前の節で言及されている場合や、一度も言及されていない指示対象には「RD>3」の値が与えられる。

表1は、能動文の主語(動作主)と目的語(被動作主)とでは、参照距離の値の分布傾向が異なり、相対的に主語のトピック性がより高いことを示している。

表1.能動文の指示対象の参照距離

	主語(動作主)		目的語(被動作主)	
	N	(%)	N	(%)
RD=1	144	(75)	86	(45)
RD=2-3	20	(10)	51	(27)
小計	164	(85)	137	(72)
RD>3	24	(13)	51	(27)
その他	3	(2)	3	(1)
合計	191		191	

RD=1とRD=2-3の値をとる指示対象は、トピック性の高いものとして、表ではその割合が小計に示してあるが、その割合とRD>3の値をとる指示対象の割合を比較すると、能動文の主語は目的語に比べて全般的にトピック性の高い値を示す傾向が強いといえる。また、RD=1とRD=2-3の分布に、指示対象のトピック性の違いが顕著に現れており、RD=1の割合は主語の方がかなり高くなっている。

次に、表2で受動文の動作主と主語(被動作主)の参照距離を見ることにする。

表2.受動文の指示対象の参照距離

	動作主		主語(被動作主)	
	N	(%)	N	(%)
RD=1	29	(33)	58	(66)
RD=2-3	21	(24)	20	(23)
小計	50	(57)	78	(89)
RD>3	38	(43)	10	(11)
その他	0	(0)	0	(0)
合計	88		88	

受動文では、動作主のRD=1、2-3の小計が57%となっており、同じ値をとる能動文の主語(動作主)の割合が85%(表1)であったのと比べると、トピック性の高い指示対象の割合が少ないことがわかる。また、RD=1、2-3の値をとる指示対象は能動文の目的語でも72%(表1)であったことから、受動文の動作主のトピック性は、能動文の主語と目的語よりもさらに低い傾向にあることがわかる。また、これとは対照的に、RD=1、2-3の値をとる主語(被動作主)は89%にのぼり、受動文の主語が非常にトピック性の高いことを示している。

以上、参照距離の統計調査から、能動文と受動文の動作主と被動作主の前方照応可能性に関して次の二つの点が明らかになった。一つは、能動文、受動文共に、主語として選択される指示対象は相対的により高いトピック性を示す傾向があるということである。もう一つは、受動文の動作主がトピック性のある程度、高く維持していたということである。このことは、動作主の降格が受動文の機能のすべてではないこと、すなわち、受動文の動作主が主語としてコード化されないのは、そのトピック性が低いからというよりもむしろ、被動作主のトピック性がより高いためである場合が多いことを示している。したがって、表1.2の統計は、能動文と受

動文の選択が、指示対象の談話における相対的なトピック性の度合という同一の原則によって条件付けられていることを意味している。

## 2.2.2 トピックの持続

トピックの持続は、後続する10の節の中で同一の指示対象が言及される回数を延べ数で示す方法によって測定される。一度も言及されない指示対象は最もトピック性の低いことを示す値「TP=0」を付与され、すべての節で言及されている対象はトピック性の最も高い値「TP=10」を付与される。なお、以下の表では、トピックの持続が0-2までのものと、それ以上のものの二つに大きく分けて表記している。トピックの持続の値は「後方照応可能性」の範囲の長さを示しており、値が大きいほど後方照応の範囲も長く、それに比例して指示対象が談話において果たす役割も重要である、すなわちトピック性が高いと考えられる。

表3.能動文の指示対象のトピックの持続

	主語（動作主）		目的語（被動作主）	
	N	(%)	N	(%)
TP=0-2	38	(20)	57	(30)
TP≥3	144	(75)	125	(65)
その他	9	(5)	9	(5)
合計	191		191	

この表からは、能動文では、TP≥3の値をとるものは主語で75%、目的語ではそれよりやや少ない65%であることがわかる。このことから、参照距離同様、トピックの持続に関しても能動文の目的語は主語よりもトピック性のより低い傾向があることがわかる。ただし、TP≥3の値をとる主語と目的語の割合の差は10%でしかない。また、参照距離に関しても、表1に示されていたように、RD=1、RD=2-3の小計が、主語は85%、目的語は72%であり、差が13%でしかないことから、能動文の主語と目的語は、前方照応可能性と後方照応の持続という二つの認知的側面において、トピック性に顕著な差が存在しないといえる。

これとは対照的に、受動文では、動作主と主語（被動作主）に目立った差が見られる。受動文の主語は81%の割合でTP≥3の値を示す。この数値は同じ値をとる能動文の主語の割合（表3参照）と比べてもさらに高い。

表4.受動文の指示対象のトピックの持続

	動作主		主語（被動作主）	
	N	(%)	N	(%)
TP=0-2	55	(62.5)	17	(19)
TP≥3	33	(37.5)	71	(81)
その他	0	(0)	0	(0)
合計	88		88	

反対に、TP≥3の値をとる受動文の動作主は37.5%であるため、その割合は能動文の目的語と比べても著しく低い（表3参照）。

これまでのところでは、能動文の主語と目的語の間には、トピック性に大きな差が見られないという点と、反対に、受動文の動作主と主語では、トピック性の高さに明らかな差が存在しているという点の二つを示した。二つの構文のこのような傾向の違いは、トピックの持続の値ごとに指示対象の分布をまとめた図1.2に、より明確に現れている。図1は能動文の選択の条件について次の二つの点を示している。まず、一つには、TP=0以外の値に関しては主語と目的語が比較的均等に分布しているということである。そして、二つ目には、TP=0の値については、目的語の割合が主語を大きく上回っているということである。このことは、能動文の主語と目的語のトピック性の差が、TP=0の値をとる指示対象の割合の差によるものであることを意味している。また、図2は、受動文では、動作主がトピック性の低い値に集中して分布しており、値が高くなるにつれ徐々にその割合が減少するのに対して、主語（被動作主）はトピック性の高い値に集中しており、動作主とは対照的な分布となっている。

## 3. おわりに

以上、Givón (1983a) の分析方法を適用することによって、日本語においても、指示対象のトピック性がヴォイスの選択に影響を与えており、動作主が被動作主よりもトピック性が高い、あるいは両者にトピック性の差が見られないという語用論的な条件 ( $A \geq P$ ) のもとでは能動文が選択され、被動作主のトピック性が動作主よりも高いという語用論的な条件 ( $A < P$ ) のもとでは受動文が選択されることを統計的に示した。つまり、両構文共に、トピック性の高い対象が主語の位置に現れる傾向にあることから、日本語においても、ヴォイスは、談話にお

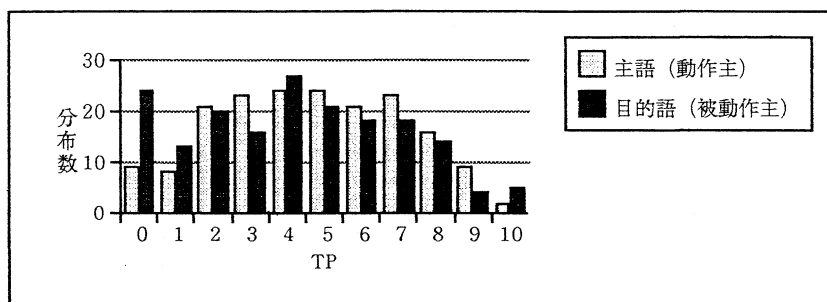


図1.能動文のトピックの持続

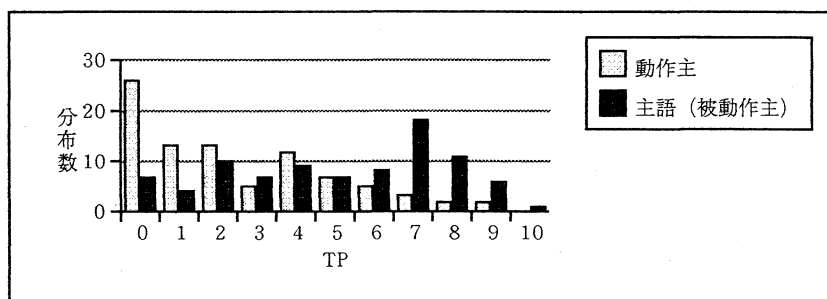


図2.受動文のトピックの持続

いてより重要な役割を果たす対象を主語の位置にコード化することによって、談話全体の結束性を高めるという語用論的機能を有していることが明らかになった。

また、コンテキストに基づいてヴォイスの選択を予測することを目的とした場合、「参照距離」と「トピックの持続」はどちらも指示対象のトピック性の一面を数量的に捉えたものではあるが、後者には、能動文、受動文の傾向の違いがより明確に現れているため、日本語の書き言葉（ナラティブ）におけるヴォイスの選択を予測する上では、参照距離よりもトピックの持続の方がより重要な要因であると考えられる。

#### 謝辞

本研究は、平成9年度東北大学大学院国際文化研究科共同研究プロジェクト経費「国際文化研究」「共有資源としての言語コーパス作成」の援助を受けて行われています。

#### 参考文献

- Chafe, Wallace. 1987. "Cognitive constraints on information flow". In: *Coherence and grounding in discourse*, ed. by Russell Tomlin, 21-51. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- . 1994. *Discourse, consciousness, and time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Givón, Talmy. 1983a. "Topic continuity in discourse: An introduction". In: *Topic continuity in discourse*, ed. by Talmy Givón, 1-41. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- . (ed.). 1983b. *Topic continuity in discourse*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- . (ed.). 1994. *Voice and inversion*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1976. "Subject and Topic: A new typology of language". In: *Subject and Topic*, ed. by, Charles N. Li, 457-90. New York: Academic Press.
- Wright, Suzanne and Talmy Givón. 1987. "The pragmatics of indefinite reference: Quantified text-based studies". *Studies in Language* 11, 1, 1-33.
- 久野すすむ (1978) 『談話の文法』 東京：大修館。